

調査の概要

- 調査の目的
義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立し、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる
- 調査の対象学年
小学校第6学年、特別支援学校小学部第6学年、中学校第3学年、中等教育学校第3学年、特別支援学校中部第3学年
- 調査の内容
教科に関する調査(国語、算数・数学) 主として「知識」に関する問題(国語A、算数・数学A)、主として「活用」に関する問題(国語B、算数・数学B)
- 調査の方式
生活習慣や学習環境に関する質問紙調査・児童生徒に対する調査、学校に対する調査
平成19年度から21年度までの悉皆調査の結果、全国及び各地域等の信頼性の高いデータが蓄積され、教育に関する検証改善サイクルの構築も着実に進んでいることから、22年度調査においては、これまでの調査と一定の継続性を保ちながら、調査方式を悉皆調査から抽出調査及び希望利用方式に切り替えている。
- 4月20日に抽出調査を実施した学校・児童生徒数 [小学校]大阪府:135校10540人(13.2%) [中学校]大阪府:147校21637人(30.9%)

調査及び結果の特徴

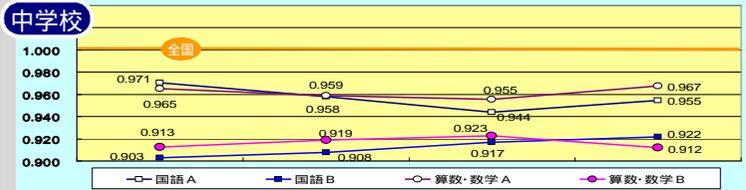
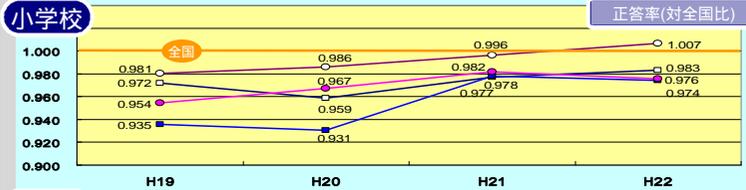
平成22年度調査は抽出調査であるため、分析に用いる平均正答率等の数値は、全国において±0.2%、都道府県では±1%以内の幅を有している。従って、平均正答率の数値は、次の表に示す範囲で幅があることを踏まえ、成果、課題等を判断する必要がある。

	全国A	全国B	算数A	算数B	国語A	国語B	中数A	中数B
大阪府	81.1~82.7	74.8~76.9	73.7~75.7	47.0~49.2	71.0~72.3	59.3~61.1	61.4~63.6	38.4~40.6
全国	83.2~83.5	77.7~78.0	74.0~74.4	49.1~49.5	75.0~75.2	65.1~65.5	64.4~64.8	43.1~43.5

これまでの調査と同様、主として「活用」に関する問題(B問題)で、記述式問題を中心に課題が見られる。
主として「知識」に関する問題(A問題)では、文の構成を理解すること、伝えたい内容を適切に書くこと、推敲すること(以上国語)、また割合や比例、二つの数量の関係を理解すること(以上算数・数学)など継続的な課題が見られる。
中学校調査の中には、スピーチなどにおける話し方の工夫をとらえることや、円の面積を求めることなど、小学校調査から引き続き課題が見られるものがあり、小学校・中学校を通じた継続的な指導が必要である。

校種・教科・区分別正答率比較 / 対全国比経年比較

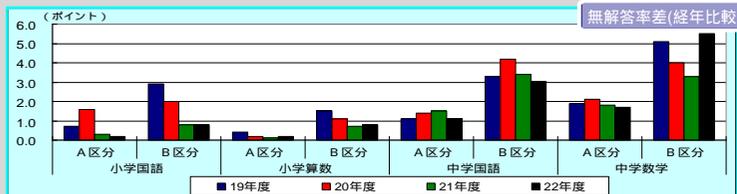
校種	区分	H19			H20			H21			H22		
		大阪府	全国	差									
小学	A区分	79.4	81.7	-2.3	62.7	65.4	-2.7	68.3	69.9	-1.6	81.9	83.3	-1.4
	B区分	58.0	62.0	-4.0	47.0	50.5	-3.5	49.4	50.5	-1.1	75.8	77.8	-2.0
小算	A区分	80.5	82.1	-1.6	71.2	72.2	-1.0	78.4	78.7	-0.3	74.7	74.2	0.5
	B区分	60.7	63.6	-2.9	49.9	51.6	-1.7	53.8	54.8	-1.0	48.1	49.3	-1.2
中語	A区分	79.2	81.6	-2.4	70.5	73.6	-3.1	72.7	77.0	-4.3	71.7	75.1	-3.4
	B区分	65.0	72.0	-7.0	55.2	60.8	-5.6	66.3	74.5	-8.2	60.2	65.3	-5.1
中数	A区分	69.4	71.9	-2.5	60.5	63.1	-2.6	59.9	62.7	-2.8	62.5	64.6	-2.1
	B区分	55.3	60.6	-5.3	45.2	49.2	-4.0	52.5	56.9	-4.4	39.5	43.3	-3.8



数値は「大阪府平均正答率÷全国平均正答率」で算出し、その結果について4年間の推移を見たもの

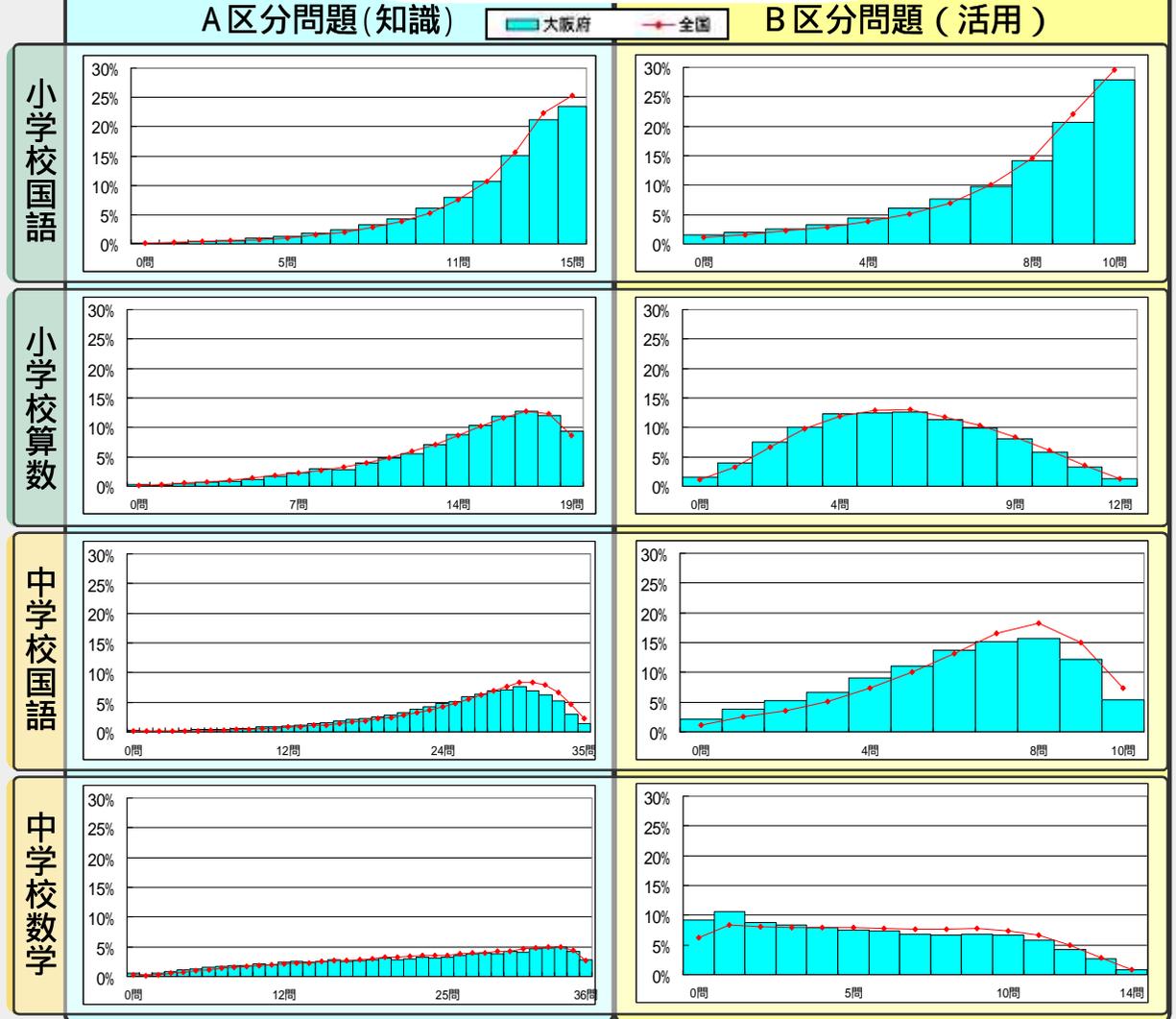
校種・教科・区分別無解答率比較 / 対全国差経年比較

校種	区分	大阪府				全国				差「大阪府-全国」の値			
		19年度	20年度	21年度	22年度	19年度	20年度	21年度	22年度	19	20	21	22
小学	A区分	2.7	12.5	10.2	2.8	2.0	10.9	9.9	2.6	0.7	1.6	0.3	0.2
	B区分	11.6	14.3	12.9	5.0	8.7	12.3	12.1	4.2	2.9	2.0	0.8	0.8
小算	A区分	1.5	3.2	2.2	2.6	1.1	3.0	2.1	2.4	0.4	0.2	0.1	0.2
	B区分	7.4	7.1	6.9	7.0	5.9	6.0	6.2	6.2	1.5	1.1	0.7	0.8
中語	A区分	4.6	5.2	4.8	3.8	3.5	3.8	3.3	2.7	1.1	1.4	1.5	1.1
	B区分	8.5	12.9	9.0	9.8	5.2	8.7	5.6	6.8	3.3	4.2	3.4	3.0
中数	A区分	6.0	8.7	6.9	8.0	4.1	6.6	5.1	6.3	1.9	2.1	1.8	1.7
	B区分	19.5	17.4	13.0	24.8	14.4	13.4	9.7	19.3	5.1	4.0	3.3	5.5



「大阪府平均無解答率 - 全国平均無解答率」の結果について4年間の推移を見たもの

正答数分布(横軸:正答数・縦軸:割合)



小学校国語

A 区分問題（「知識」に関する問題）

平成22年度
全国学力・学習状況調査
学力調査結果報告

平均正答率は81.9%であり8割を超えてはいるものの、各設問を個別に見ると継続的な課題が見られるものがあり、引き続き定着を図る取り組みを進める必要がある

正答率比較



平均正答率は全国を1.4ポイント下回った

全国の平均正答率が83.3%であるのに対し、大阪府の平均正答率は81.9%であり、1.4ポイント全国を下回った。平成22年度調査は抽出調査であり、全国の平均正答率は83.2～83.5%、大阪府の平均正答率は81.1～82.7%の幅を有しているため、最も差が大きい場合は-2.4ポイント、逆に最も差が小さい場合は-0.5ポイントとなる。平均正答率の幅も踏まえて全国の状況との差をとらえたとき、昨年度とほぼ同程度と考えられる。

対全国比はゆるやかな増加傾向にある

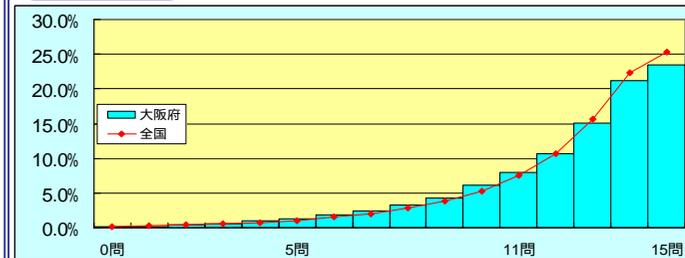
各年度における平均正答率は年度ごとの問題の難易度に左右されるため、それらの条件を捨象して比較する必要がある。そこで、全国の平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合で比較した。平成22年度調査は抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、この4年間で平均正答率は全国の状況に近づきつつあることがわかる。



具体的な課題

- 文学的文章に登場する人物を相互に関係付けて読むこと(登場人物の人間関係をとらえて書く)
- 文と文との意味のつながりを理解し、文の論理を考えて書くこと(メモを基にして、児童会だよりの中に入る適切な内容を書く)
- 文章全体の構成の効果を考えて書くこと(意見文に書く内容をまとめた4枚のカードを構成した順番に並べる)
- 学年別漢字配当表の当該学年の前の学年までに配当されている漢字を正しく書くこと(「ひさしがり」「ぎじゅうつ」)

正答数分布



正答数分布の様子は全国の状況と同傾向

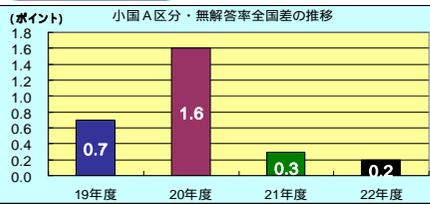
全国、大阪府とも15問(全問正解)を頂点にした逆し字型を描いている。大阪府は5～11問の間では、全国よりも分布の割合が高く、13～15問の間では、全国よりも分布の割合が低い。

正答数分布を正答数により1/3ずつ低位層、中位層、高位層の3層に分け、分布の割合を全国を1とした割合で大阪府の様子を比較してみると、低位層は1.095、中位層は1.171、高位層は0.963となり、全国に比べ中位層の割合が高い。

4年間の変化を見ると、低位層の割合は減少傾向、中位層の割合はやや増加の傾向にある。



無解答率比較

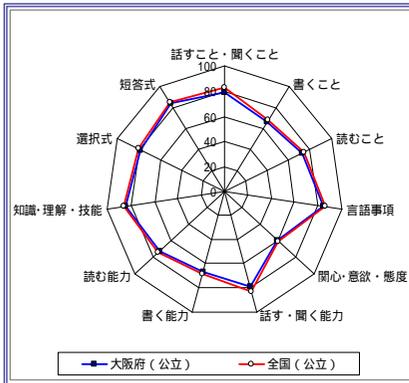


無解答率は全国の状況を0.2ポイント上回った

無解答率の全国との差を経年比較すると、平成19年度は0.7ポイント、平成20年度は1.6ポイントであったものが、平成21年度は0.3ポイント、平成22年度は0.2ポイントと全国との差は縮まる傾向にある。

領域・観点・問題形式別

平成22年度 レーダーチャート

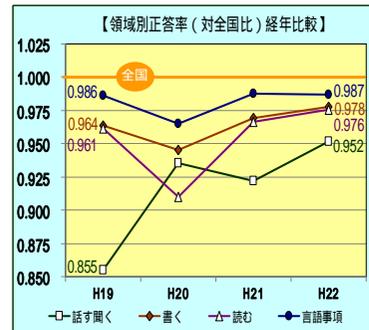


領域・観点・問題形式別の状況は概ね全国と同傾向

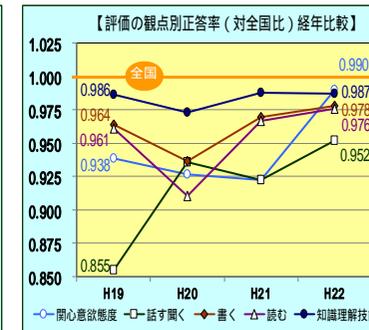
レーダーチャートの描くラインは、全国の状況とほぼ重なるように同傾向を示している。

今回の出題内容においては、全国、大阪府とも「書くこと」「書く能力」「関心・意欲・態度」が低い値を示している。

平成22年度調査が抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、全国の平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合で比較すると、領域、評価の観点、問題形式それぞれについて次のような傾向が見られる。



領域別に対全国比を経年比較すると、「話すこと・聞くこと」の領域の伸びが最も大きい。また「言語事項」の領域が最も高い傾向は4年間同じである。



評価の観点別に対全国比を経年比較すると、昨年度から今年度にかけて「関心・意欲・態度」の観点の値が大きな伸びを示しており、全領域の中で最も全国平均に近づいている。



問題形式別に対全国比を経年比較すると、「短答式」が「選択式」よりも高い傾向が続いている。

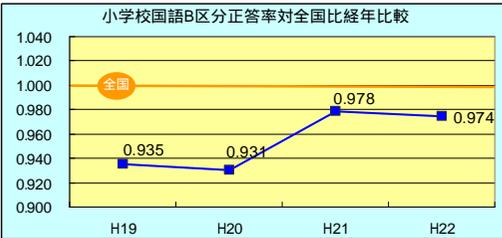
平均正答率は75.8%であり、理由を明確にして説明するなどの記述式問題を中心に課題が見られる

正答率比較



平均正答率は全国を2.0ポイント下回った

全国の平均正答率が77.8%であるのに対し、大阪府の平均正答率は75.8%であり、2.0ポイント全国を下回った。平成22年度調査は抽出調査であり、全国の平均正答率は77.7～78.0%、大阪府の平均正答率は74.8～76.9%の幅を有しているため、最も差が大きい場合は-3.2ポイント、逆に最も差が小さい場合は-0.8ポイントとなる。平均正答率の幅も踏まえて全国との状況との差をとらえたとき、昨年度とほぼ同程度と考えられる。



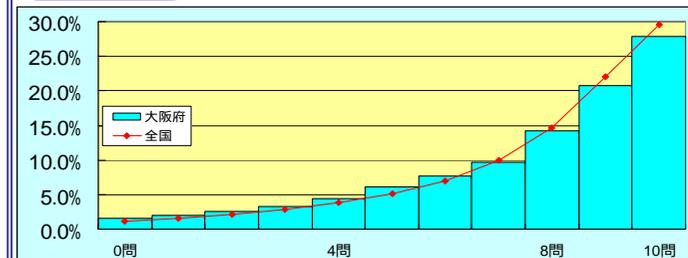
対全国比は昨年度とほぼ同じであった

各年度における平均正答率は年度ごとの問題の難易度に左右されるため、それらの条件を捨象して比較する必要がある。そこで、全国の平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合で比較した。平成22年度調査は抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、平成22年度は0.974となり、平成21年度の0.978とほぼ同じであった。

具体的な課題

資料や情報に基づいて自分の考えや感想を明確に記述すること
（複数の資料から必要な情報を関係付けて読み、時計を一つ選んで、その理由を明確にして説明する）
話の中心や話し手の意図をとらえながら聞き、適切に質問すること
（聞き手が質問した内容に合う質問の観点を選択する）
目的や意図に応じて聞き手を引きつけるように話すこと（話し手が聞き手に問いかける良さについての説明をする）

正答数分布



正答数分布の様子は全国の状況と同傾向

全国、大阪府とも10問(全問正解)を頂点にした逆し字型を描いている。大阪府は0～7問の間では、全国よりも分布の割合が高く、8～10問の間では、全国よりも分布の割合が低い。
正答数分布を正答数により1/3ずつ低位層、中位層、高位層の3層に分け、分布の割合を全国を1とした割合で大阪府の様子を比較してみると、低位層は1.192、中位層は1.077、高位層は0.947となり、全国に比べ低位層の割合が高い。
4年間の変化を見ると、高位層はやや増加の傾向にあるものの、減少傾向にあった低位層が再び増加している。



無解答率比較

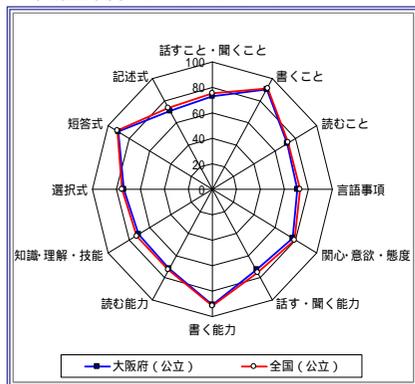


無解答率は全国の状況を0.8ポイント上回った

無解答率の全国との差を経年比較すると、平成19年度は2.9ポイント、平成20年度は2.0ポイント上回っていたのに対し、平成21年度と平成22年度はともに0.8ポイント上回るにとどまっており、全体的には全国との差は縮まる傾向にある。

領域・観点・問題形式別

平成22年度 レーダーチャート

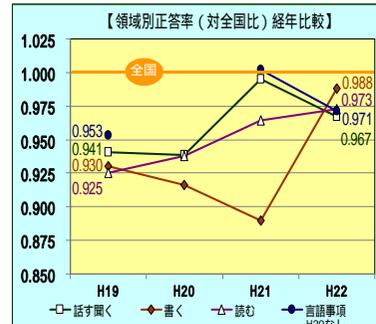


領域・観点・問題形式別の状況は概ね全国と同傾向

レーダーチャートの描くラインは、全国の状況とほぼ重なるように同傾向を示している。

今回の出題内容においては、大阪府・全国ともに「書くこと」「書く能力」「短答式」で比較的高い値を示している。

平成22年度調査が抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、全国の平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合で比較すると、領域、評価の観点、問題形式それぞれについて次のような傾向が見られる。



領域別に対全国比を経年比較すると、「読むこと」の領域が増加傾向にある。また、平成21年度から平成22年度にかけて、過去3年間減少傾向であった「書くこと」の領域の値が全領域の中で最も大きく、全国平均に近くなった。



評価の観点別に対全国比を経年比較すると、領域別とほぼ同じ傾向が見られる。平成21年度から平成22年度にかけての「書く能力」の観念の値の伸びが大きい。



問題形式別に対全国比を経年比較すると、「選択式」「短答式」「記述式」のいずれの問題形式も全国の状況に近づきつつあることがわかる。

小学校算数

A 区分問題（「知識」に関する問題）

平成22年度
全国学力・学習状況調査
学力調査結果報告

平均正答率は74.7%であるが、各設問を個別に見ると継続的な課題が見られるものがあり、引き続き定着を図る取り組みを進める必要がある

正答率比較

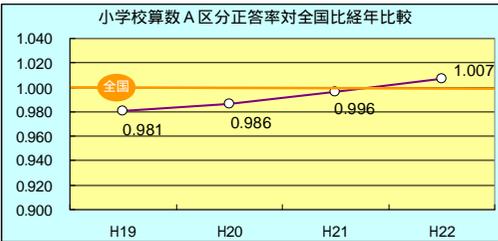


平均正答率は全国を0.5ポイント上回った

全国平均正答率が74.2%であるのに対し、大阪府の平均正答率は74.7%であり、0.5ポイント全国を上回った。平成22年度調査は抽出調査であり、全国平均正答率は74.0～74.4%、大阪府の平均正答率は73.7～75.7%の幅を有しているため、最も差が大きい場合は+1.7ポイント、逆に最も差が小さい場合は-0.7ポイントとなる。平均正答率の幅も踏まえて全国との状況との差をとらえたとき、やや上昇傾向が見られる。

今年度初めて全国を上回る

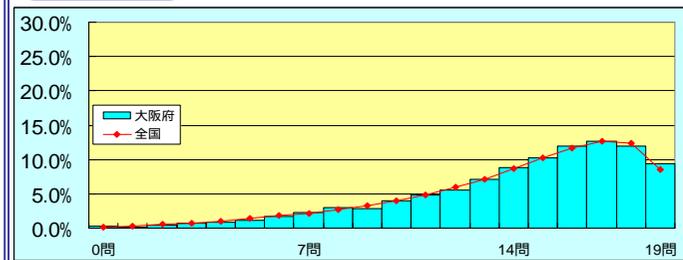
各年度における平均正答率は年度ごとの問題の難易度に左右されるため、それらの条件を捨象して比較する必要がある。そこで、全国平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合と比較した。平成22年度調査は抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、4年間の推移を見てみると平成19年度から値は一貫して増加しており、今年度初めて全国平均を上回った。



具体的な課題

割合の意味理解（全体の面積に対する部分の面積の割合を答える）
計算の意味理解（8mの棒（4kg）の1m分の重さを求める式と答えを書く）
数（分数）の意味理解（2割のジュースを3等分したときの一つ分の量を分数で表す）

正答数分布

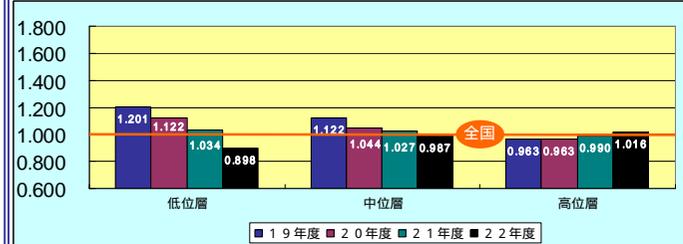


正答数分布の様子は全国と同傾向

全国、大阪府とも17問を頂点とした右よりの山型を描いている。大阪府は4～6問の間では、全国よりも分布の割合が低く、14～19問の間では、全国よりも分布の割合が高い。

正答数分布を正答数により1/3ずつ低位層、中位層、高位層の3層に分け、分布の割合を全国を1とした割合で大阪府の様子を比較してみると、低位層は0.898、中位層は0.987、高位層は1.016となり、全国に比べ低位層ほど割合が低く、高位層では全国を上回る。

4年間の変化を見ると、低・中位層の割合は年々同じような割合で減少傾向が見られ、高位層では増加傾向が見られる。



無解答率比較

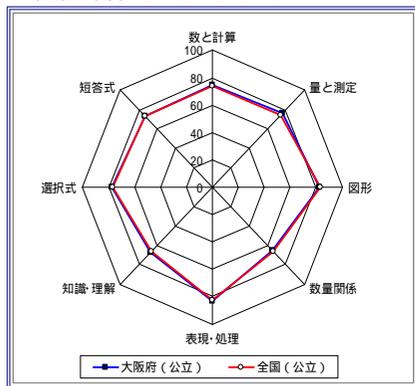


無解答率は全国の状況を0.2ポイント上回った

無解答率の全国との差を経年比較すると、全国を上回った値は、平成19年度は0.4ポイント、平成20年度は0.2ポイント、平成21年度は0.1ポイントと昨年度まで減少傾向にあったが、今年度再度0.2ポイント全国を上回る結果になった。

領域・観点・問題形式別

平成22年度 レーダーチャート

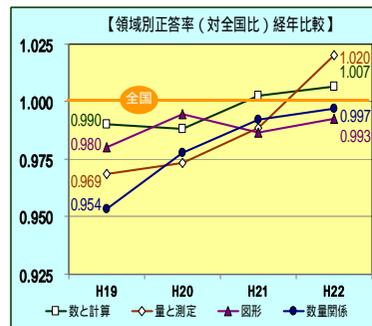


領域・観点・問題形式別の状況は概ね全国と同傾向

レーダーチャートの描くラインは、全国との状況とほぼ重なるように同傾向を示している。

今回の出題内容においては、全国、大阪府とも「表現・処理」で高く、「数量関係」「知識・理解」でやや低い値を示している。

平成22年度調査が抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、全国平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合と比較すると、領域、評価の観点、問題形式それぞれについて次のような傾向が見られる。



領域別に対全国比を経年比較すると、全領域で増加傾向にある。その中で「数と計算」「量と測定」の2領域で今年度全国平均を上回った。



評価の観点別に対全国比を経年比較すると、「表現・処理」「知識・理解」の両観点ともに値は増加傾向にあり、今年度はそろって全国を上回った。



問題形式別に対全国比を経年比較すると、「選択式」「短答式」とも平成20年度以降は増加傾向にあり、今年度そろって全国を上回った。

小学校算数

B 区分問題（「活用」に関する問題）

平成22年度
全国学力・学習状況調査
学力調査結果報告

平均正答率は48.1%であり、日常的な事象について、筋道を立てて考え、数学的に表現することなどの記述式問題を中心に課題が見られる

正答率比較



平均正答率は全国を1.2ポイント下回った

全国平均正答率が49.3%であるのに対し、大阪府の平均正答率は48.1%であり、1.2ポイント全国を下回った。平成22年度調査は抽出調査であり、全国平均正答率は49.1～49.5%、大阪府の平均正答率は47.0～49.2%の幅を有しているため、最も差が大きい場合には-2.5ポイント、逆に最も差が小さい場合には+0.1ポイントとなる。平均正答率の幅も踏まえて全国との状況との差をとらえたとき、昨年度とほぼ同程度と考えられる。

対全国比には大きな変化は見られない

各年度における平均正答率は年度ごとの問題の難易度に左右されるため、それらの条件を捨象して比較する必要がある。そこで、全国平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合で比較した。平成22年度調査は抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、平成22年度は0.976となり、平成21年度まで増加傾向を示していたが、今年度はわずかに減少に転じた。



具体的な課題

- 提示された数値や条件を基に筋道を立てて考え記述すること（本立ての部品の図を見てどのような長方形をかく）
- 日常的な事象を数理的にとらえ、数学的に表現すること（バスのドアが動く様子を表した図を見て、円周の一部と直線の長さの大小についての正しい記述を選び、判断のわけを書く）
- 事象を数学的に解釈し、判断の根拠を説明すること（割引券を使うと値引きされる金額が最も大きくなる商品を選び、そのわけを書く）
- 示された説明を解釈し、他の図形を適用してその説明を数学的に表現すること（平行四辺形から台形に図形を変えて、示された二つの三角形の面積が等しいことの説明を書く）

正答数分布



正答数分布の様子は
全国の状況と同傾向

全国、大阪府とも6問を頂点にしたやや左よりの山型を描いている。大阪府は0～4問の間では、全国よりも分布の割合が高い。正答数分布を正答数により1/3ずつ低位層、中位層、高位層の3層に分け、分布の割合を全国を1とした割合で大阪府の様子を比較してみると、低位層は1.106、中位層は0.977、高位層は0.958となり、全国に比べ低位層の割合が高い。4年間の変化を見ると、平成19年度を除けば大きな変化は見られない。



無解答率比較

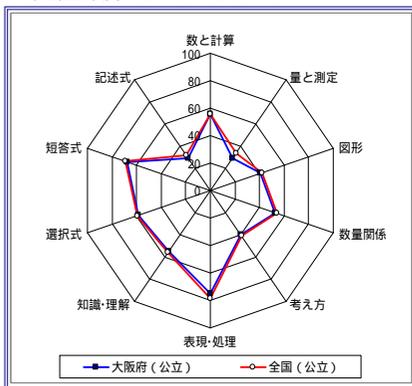


無解答率は全国の状況を0.8ポイント上回った

無解答率の全国との差を経年比較すると、全国を上回った値は平成19年度は1.5ポイント、平成20年度は1.1ポイント、平成21年度は0.7ポイントと昨年度まで減少傾向にあったが、今年度は0.8ポイントとわずかながら全国との差が広がった。

領域・観点・問題形式別

平成22年度 レーダーチャート

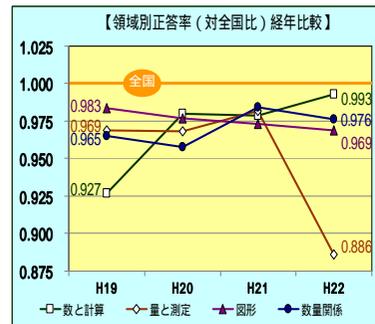


領域・観点・問題形式別の状況は概ね全国と同傾向

レーダーチャートの描くラインは、全国の状況とほぼ重なるように同傾向を示しているが、「量と測定」の領域で全国との差が大きくなっている。

今回の出題内容においては、全国、大阪府とも「量と測定」「図形」「数学的な考え方」「記述式」の項目が低い値を示している。

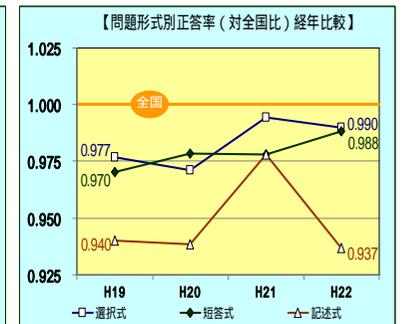
平成22年度調査が抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、全国平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合で比較すると、領域、評価の観点、問題形式それぞれについて次のような傾向が見られる。



領域別に対全国比を経年比較すると、「数と計算」の領域で増加傾向が見られるが、「量と測定」の領域については今年度大きく減少している。



評価の観点別に対全国比を経年比較すると、これまで増加傾向にあった「数学的な考え方」の観点は昨年度と同じ傾向、3年連続同じ傾向であった「表現処理」の観点は今年度値が減少している。



問題形式別に対全国比を経年比較すると、「選択式」「短答式」については増加が見られるが、「記述式」については昨年度を除けば値が小さい傾向が続いている。

中学校国語

A 区分問題（「知識」に関する問題）

平成22年度
全国学力・学習状況調査
学力調査結果報告

平均正答率は71.7%であるが、各設問を個別に見ると継続的な課題が見られるものがあり、引き続き定着を図る取り組みを進める必要がある

正答率比較

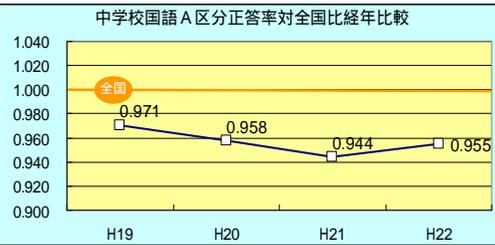


平均正答率は全国を3.4ポイント下回った

全国の平均正答率が75.1%であるのに対し、大阪府の平均正答率は71.7%であり、3.4ポイント全国を下回った。平成22年度調査は抽出調査であり、全国の平均正答率は75.0～75.2%、大阪府の平均正答率は71.0～72.3%の幅を有しているため、最も差が大きい場合には-4.2ポイント、逆に最も差が小さい場合には-2.7ポイントとなる。平均正答率の幅も踏まえて全国の状況との差をとらえたとき、昨年度とほぼ同程度と考えられる。

対全国比には大きな変化は見られない

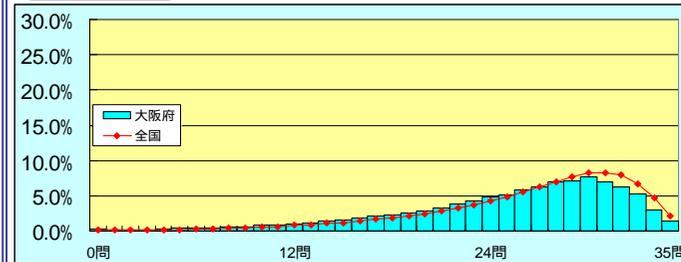
各年度における平均正答率は年度ごとの問題の難易度に左右されるため、それらの条件を捨象して比較する必要がある。そこで、全国の平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合で比較した。平成22年度調査は抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、平成22年度は0.955となり、平成21年度の0.944とほぼ同じであった。



具体的な課題

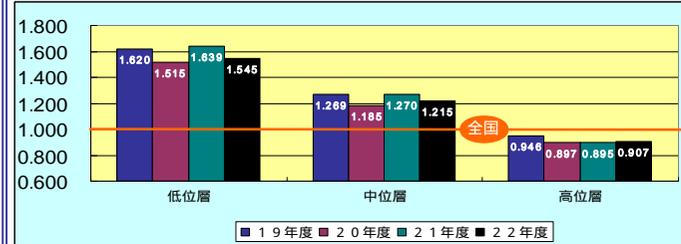
書いた文章を読み返し、読みやすく分かりやすい文章にすること
(一文を二文に分けるとともに、二文目に主語を補って書く)
表現の仕方に注意して説得力のある話を書くこと (演説の話方の特徴として適切なものを選択する)
論理の展開の仕方をとらえて、内容を理解すること (「鳥とは違う、カモ/ハシの特徴を選択する)
相手に応じて表現を工夫して書くこと (小学生に向けた案内文となるように適切な文を書く)

正答数分布

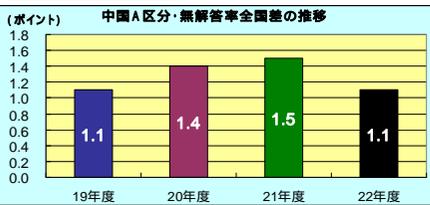


正答数分布の様子は全国の状況と同傾向

全国、大阪府とも30問(全国は31問も同値)を頂点にした右よりのなだらかな山型を描いている。28～35問の間では、全国よりも分布の割合が低く、27問以下では割合が高くなっている。正答数分布を正答数により1/3ずつ低位層、中位層、高位層の3層に分け、分布の割合を全国を1とした割合で大阪府の様子を比較してみると、低位層は1.545、中位層は1.215、高位層は0.907となり、全国に比べ中位層から低位層に向かうにしたがって、その割合が高くなる。4年間の変化を見ると、高位層の割合が低く、中・低位層の割合が高い傾向が続いている。



無解答率比較

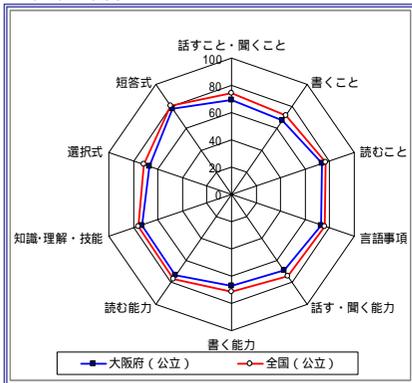


無解答率は全国の状況を1.1ポイント上回った

無解答率の全国との差を経年比較すると、平成19年度は1.1ポイント、平成20年度は1.4ポイント、平成21年度は1.5ポイント上回っており、全国との差が開く傾向にあった。しかし平成22年度は1.1ポイント上回ったにとどまり、全国との差はやや縮まる傾向にある。

領域・観点・問題形式別

平成22年度 レーダーチャート

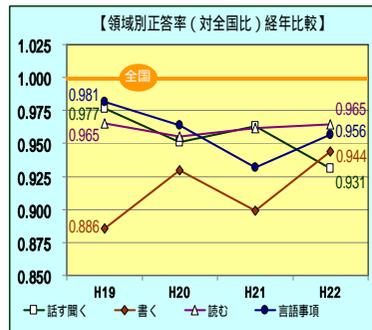


領域・観点・問題形式別の状況は概ね全国と同傾向

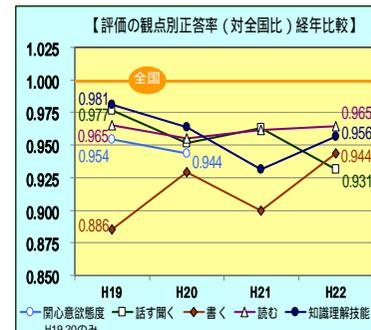
レーダーチャートの描くラインは、全国の状況とほぼ同傾向を示しているが、大阪府は全ての項目において全国を下回っている。

今回の出題内容においては、「話すこと・聞くこと」「話す・聞く能力」での全国との差が特に大きい。

平成22年度調査が抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、全国の平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合で比較すると、領域、評価の観点、問題形式それぞれについて次のような傾向が見られる。



領域別に対全国比を経年比較すると、「話すこと・聞くこと」の領域が減少傾向にある。またレーダーチャートで示されているように「話すこと・聞くこと」の領域に次いで全国との差が大きい「書くこと」の領域の値は増加傾向にある。



評価の観点別に対全国比を経年比較すると、領域別とほぼ同じ傾向が見られる。



問題形式別に対全国比を経年比較すると、「短答式」と「選択式」では「短答式」の方が対全国比が高く、その差がやや開く傾向にある。

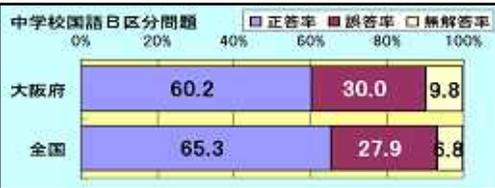
中学校国語

B 区分問題（「活用」に関する問題）

平成22年度
全国学力・学習状況調査
学力調査結果報告

平均正答率は60.2%であり、書かれている内容をもとに自分の考えを書くなどの記述式問題を中心に課題が見られる

正答率比較



平均正答率は全国を5.1ポイント下回った

全国の平均正答率が65.3%であるのに対し、大阪府の平均正答率は60.2%であり、5.1ポイント全国を下回った。平成22年度調査は抽出調査であり、全国の平均正答率は65.1～65.5%、大阪府の平均正答率は59.3～61.1%の幅を有しているため、最も差が大きい場合は-6.2ポイント、逆に最も差が小さい場合は-4.0ポイントとなる。平均正答率の幅も踏まえて全国との差をとらえたとき、昨年度とほぼ同程度と考えられる。

対全国比はゆるやかな増加傾向にある

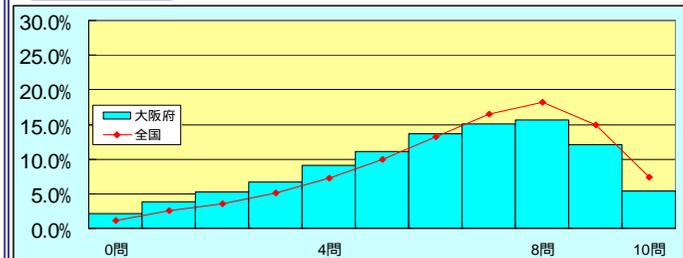
各年度における平均正答率は年度ごとの問題の難易度に左右されるため、それらの条件を捨象して比較する必要がある。そこで、全国の平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合で比較した。平成22年度調査は抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、平成22年度は0.922となり、平成21年度の0.917とほぼ同じであった。



具体的な課題

表現の仕方に注意して読み、内容について理解すること（本文中の表現がたとえている内容をとらえて書く）
資料の提示の仕方を工夫し、その方法について具体的に説明すること（資料の修正の方法を選択し、具体的なやり方とその理由を書く）
記事文に書かれている内容をもとに、自分の考えを書くこと（新聞を読んで興味をもった記事について感想を書く）
文章の内容や表現をとらえ、自分の考えを明確に説明すること（二つの表現に共通した面白さについて自分の考えを書く）

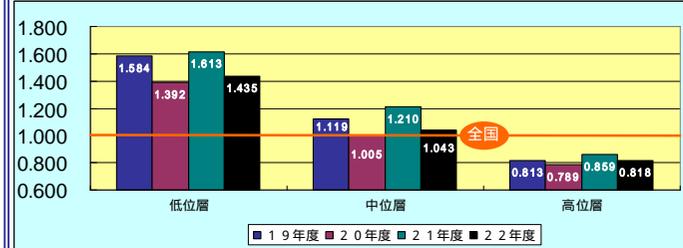
正答数分布



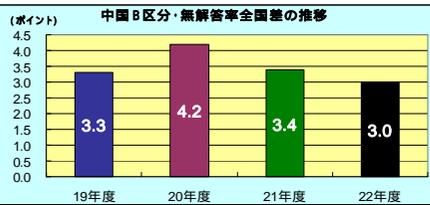
正答数分布の様子は全国と同傾向

全国、大阪府とも8問を頂点にしたやや右よりの山型を描いている。大阪府は0～6問の間では、全国よりも分布の割合が高く、7～10問の間では、全国よりも分布の割合がかなり低い。

正答数分布を正答数により1/3ずつ低位層、中位層、高位層の3層に分け、分布の割合を全国を1とした割合で大阪府の様子を比較してみると、低位層は1.435、中位層は1.043、高位層は0.818となり、全国に比べ低位層の割合が高い。4年間の変化を見ると、連続して低位層の割合が高く、高位層の割合が低い傾向が続いている。



無解答率比較

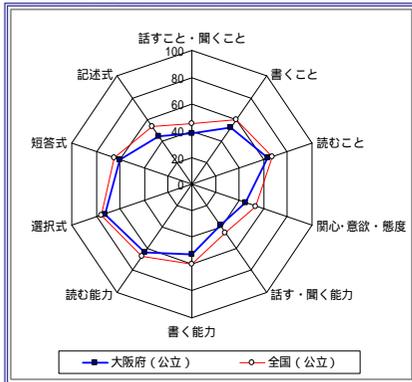


無解答率は全国の状況を3.0ポイント上回った

無解答率の全国との差を経年比較すると、平成19年度は3.3ポイント、平成20年度は4.2ポイント、平成21年度は3.4ポイント、それぞれ全国を上回っていたのに対し、平成22年度は3.0ポイント上回っており、昨年度と比べるとその差はやや小さくなった。また、平成20年度からの3年間の推移を見ると差が縮まる傾向が見られるものの、全国との差は依然として大きい。

領域・観点・問題形式別

平成22年度 レーダーチャート



領域・観点・問題形式別の状況は概ね全国と同傾向

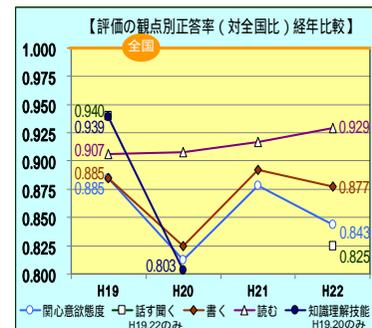
レーダーチャートの描くラインは、全国の状況とほぼ同じ傾向を示しているが、大阪府は全ての項目において全国を下回っている。

今回の出題内容においては、「話すこと・聞くこと」「話す・聞く能力」「国語への関心・意欲・態度」「記述式」の項目で全国との差が大きい。

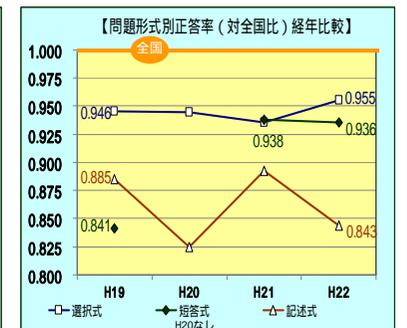
平成22年度調査が抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、全国の平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合で比較すると、領域、評価の観点、問題形式それぞれについて次のような傾向が見られる。



領域別に対全国比を経年比較すると、「読むこと」の領域には大きな変化は見られないが、「書くこと」の領域では調査年度により大きな変化が見られる。



評価の観点別に対全国比を経年比較すると、領域別とほぼ同じ傾向が見られるが、「関心・意欲・態度」の観点には「書く能力」の観点とよく似た変化があらわれている。



問題形式別に対全国比を経年比較すると、「選択式」がほぼ一定であるのに対し、「記述式」はその値が低く、さらに調査年度によって大きく変化していることがわかる。

中学校数学

A 区分問題（「知識」に関する問題）

平成22年度
全国学力・学習状況調査
学力調査結果報告

平均正答率は62.5%であるが、各設問を個別に見ると継続的な課題が見られるものがあり、引き続き定着を図る取り組みを進める必要がある

正答率比較



平均正答率は全国を2.1ポイント下回った

全国の平均正答率が64.6%であるのに対し、大阪府の平均正答率は62.5%であり、2.1ポイント全国を下回った。平成22年度調査は抽出調査であり、全国の平均正答率は64.4～64.8%、大阪府の平均正答率は61.4～63.6%の幅を有しているため、最も差が大きい場合には-3.4ポイント、逆に最も差が小さい場合には-0.8ポイントとなる。平均正答率の幅も踏まえて全国との状況との差をとらえたとき、昨年度とほぼ同程度と考えられる。

対全国比には大きな変化は見られない

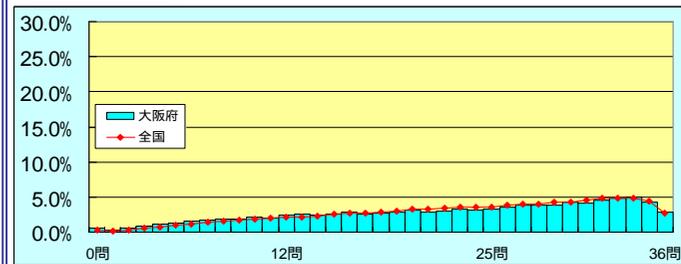
各年度における平均正答率は年度ごとの問題の難易度に左右されるため、それらの条件を捨象して比較する必要がある。そこで、全国の平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合で比較した。平成22年度調査は抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、大阪府の平均正答率の割合は4年間大きな変化は見られない。



具体的な課題

具体的な事象の中にある二つの数量の変化を調べる（比例のグラフから、xの変域に対応するyの変域を求める）
具体的な事象における数量の関係を式で表すこと（16cmの長さのひもで作る長方形の縦の長さとの横の長さの関係を式で表す）
グラフに示されている関係を式に表すこと（一次関数の式から変化の割合を求める）

正答数分布

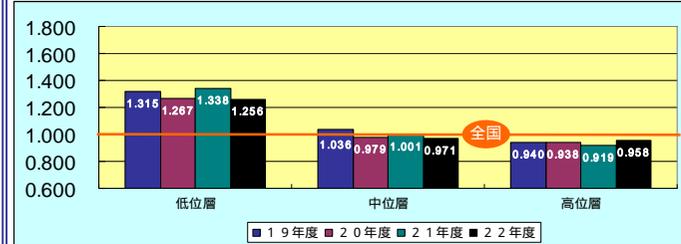


正答数分布の様子は全国の状況と同傾向

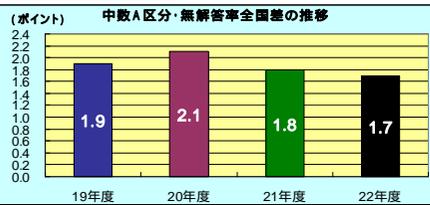
全国、大阪府とも34問を頂点とするわずかに右上がりの平坦な山型を描いている。

正答数分布を正答数により1/3ずつ低位層、中位層、高位層の3層に分け、分布の割合を全国を1とした割合で大阪府の様子を比較してみると、低位層は1.256、中位層は0.971、高位層は0.958となり、全国に比べ低位層に向かうにしたがって割合が高くなっている。

4年間の変化を見ると、高位層の割合がやや増加している傾向にはあるが、低位層の割合が高い傾向も続いている。



無解答率比較

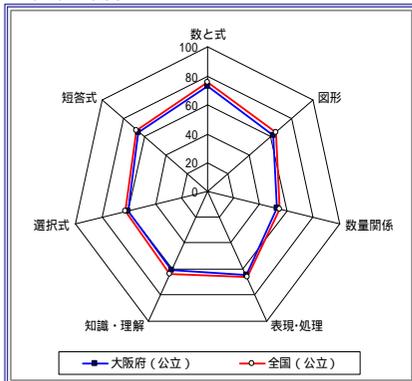


無解答率は全国の状況を1.7ポイント上回った

無解答率の全国との差を経年比較すると、平成19年度は1.9ポイント、平成20年度は2.1ポイント、平成21年度は1.8ポイント、平成22年度は1.7ポイントそれぞれ全国を上回り、平成20年度以降わずかに減少傾向にあるものの、依然として全国との差は大きい。

領域・観点・問題形式別

平成22年度 レーダーチャート

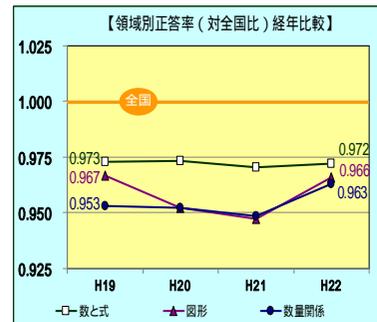


領域・観点・問題形式別の状況は概ね全国と同傾向

レーダーチャートの描くラインは、全国の状況と同傾向を示している。

今回の出題内容においては、全国、大阪府とも「数量関係」の項目でやや低い値を示している。

平成22年度調査が抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、全国の平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合で比較すると、領域、評価の観点、問題形式それぞれについて次のような傾向が見られる。



領域別に対全国比を経年比較すると、「数と式」の領域については変化が見られないが、「図形」「数量関係」の領域については、昨年度に比べると値は増加傾向にある。



評価の観点別に対全国比を経年比較すると、「知識・理解」の観点に大きな変化は見られないが、「表現・処理」の観点については今年度増加が見られた。



問題形式別に対全国比を経年比較すると、「選択式」「記述式」も値はやや減少傾向であったが、今年度については増加に転じた。

中学校数学

B 区分問題（「活用」に関する問題）

平成22年度
全国学力・学習状況調査
学力調査結果報告

平均正答率は39.5%であり、日常的な事象について、筋道を立てて考え、数学的に表現するなどの記述式問題を中心に課題が見られる

正答率比較



平均正答率は全国を3.8ポイント下回った

全国平均正答率が43.3%であるのに対し、大阪府の平均正答率は39.5%であり、3.8ポイント全国を下回った。平成22年度調査は抽出調査であり、全国平均正答率は43.1～43.5%、大阪府の平均正答率は38.4～40.6%の幅を有しているため、最も差が大きい場合は-5.1ポイント、逆に最も差が小さい場合は-2.5ポイントとなる。

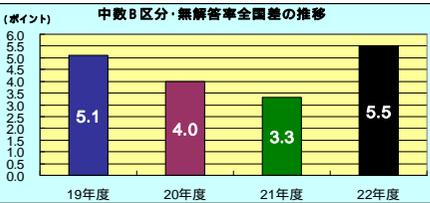
平均正答率の幅も踏まえて全国との差をとらえたとき、昨年度とほぼ同程度と考えられる。



対全国比には大きな変化は見られない

各年度における平均正答率は年度ごとの問題の難易度に左右されるため、それらの条件を捨象して比較する必要がある。そこで、全国平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合と比較した。平成22年度調査は抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、平成22年度は0.912となり、平成21年度の0.923をやや下回り、全国との差は依然として大きい。

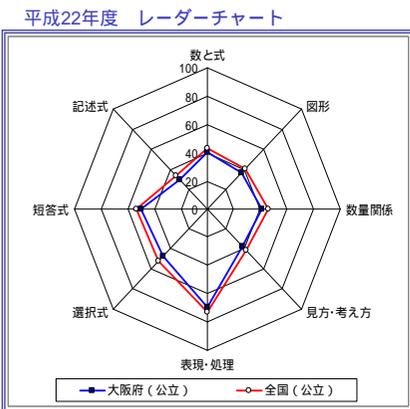
無解答率比較



無解答率は全国の状況を5.5ポイント上回った

無解答率の全国との差を経年比較すると、平成19年度は5.1ポイント、平成20年度は4.0ポイント、平成21年度は3.3ポイントと差が縮まる傾向にあったが、平成22年度は5.5ポイント上回っており、全国との差が再び広がった。全国との差は依然として大きい。

領域・観点・問題形式別



領域・観点・問題形式別の状況は概ね全国と同傾向

レーダーチャートの描くラインは、全国との状況と同傾向を示しているが、全ての項目において、大阪府は全国を下回った。全国と大阪府との差を見た場合、「図形」「選択式」でその差が大きい。

今回の出題内容においては、全国、大阪府ともに低い値の項目が多い。

平成22年度調査が抽出調査であるため、単純に経年比較することは難しいが、全国平均正答率を1とした場合の大阪府の平均正答率の割合と比較すると、領域、評価の観点、問題形式それぞれについて次のような傾向が見られる。

具体的な課題

事象を数学的に解釈し、成り立つ事柄の特徴を数学的な表現を用いて説明すること

(平行四辺形になることを証明するための根拠となる事柄を書く)

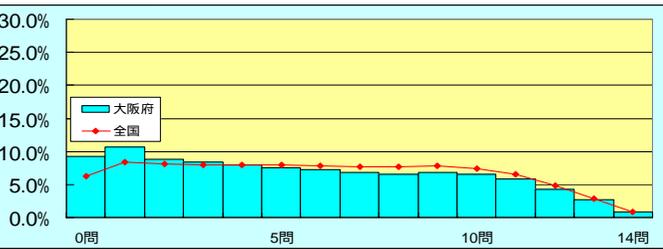
筋道立てて考え、事柄が一般的に成り立つ理由を説明すること (連続する3つの奇数の和が3の倍数になることを説明する)

事柄を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明すること (Tシャツ35枚のプリント料金が同じになる座標を選ぶ)

問題解決のための構想を立て実践し、その結果を数学的な表現を用いて説明すること

(卓球をした場合と同じ身体活動量で、運動の実施時間を半分にする別の運動を選び、その理由を説明する)

正答数分布



正答数分布の様子は全国の状況とほぼ同傾向

全国、大阪府とも1問を頂点としたゆるやかな右下がり型を描いている。大阪府は0～3問の間では、全国よりも分布の割合が高い。とりわけ0問及び1問の割合が高くなっている。一方5～12問の間では、全国よりも分布の割合が低い。

正答数分布を正答数により1/3ずつ低位層、中位層、高位層の3層に分け、分布の割合を全国を1とした割合で大阪府の様子を比較してみると、低位層は1.166、中位層は0.900、高位層は0.889となり、全国に比べ低位層の割合が高く、高位層の割合が低い。

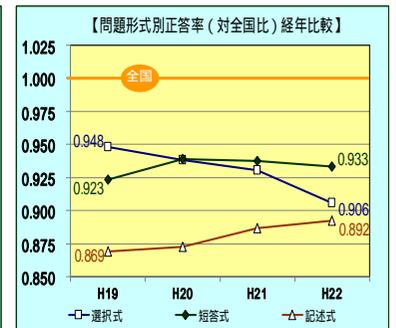
4年間の変化を見ると、高位層の割合がわずかながら高くなる傾向にはあるものの、低位層の割合は継続して高い。



領域別に対全国比を経年比較すると、「数と式」の領域は値の増加傾向が見られ、平成19年度には全ての領域の中で最も低かったのに対し、平成22年度には最も高い値を示している。



評価の観点別に対全国比を経年比較すると、全ての年度で「表現・処理」の観点に比べ「数学的な考え方」の観点が低い。



問題形式別に対全国比を経年比較すると、「選択式」が減少傾向にある。「記述式」は他の問題形式よりも低い値が、ゆるやかな増加傾向にある。

大阪の子どもたちの様子 (公立小・中学校) - 児童・生徒質問紙調査より -

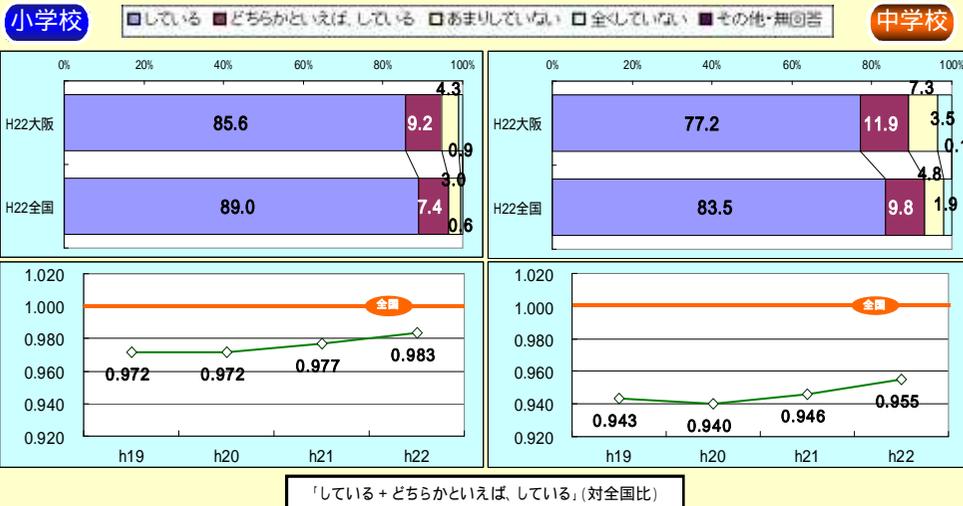
1

帯グラフの数値はすべて%表示です。
折れ線グラフの数値(対全国比)は、
大阪府/全国で算出した値です。

1 朝ごはん

Q: 朝食を毎日食べていますか?

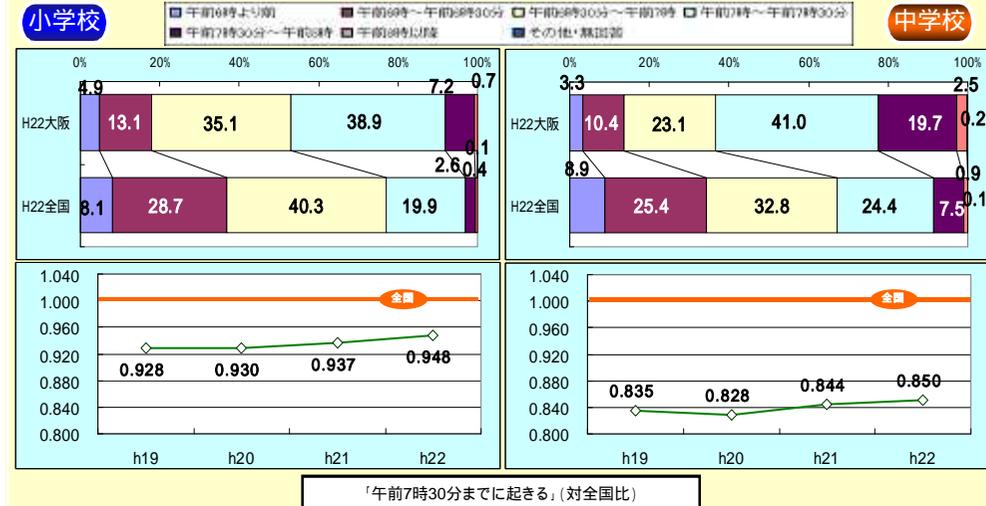
・小・中学校ともに、毎日朝食を食べている児童・生徒の割合は、全国の状況を下回る
・小・中学校ともに対全国比は増加傾向にある



2 起床時刻

Q: 普段(月～金曜日)、何時ごろに起きますか?

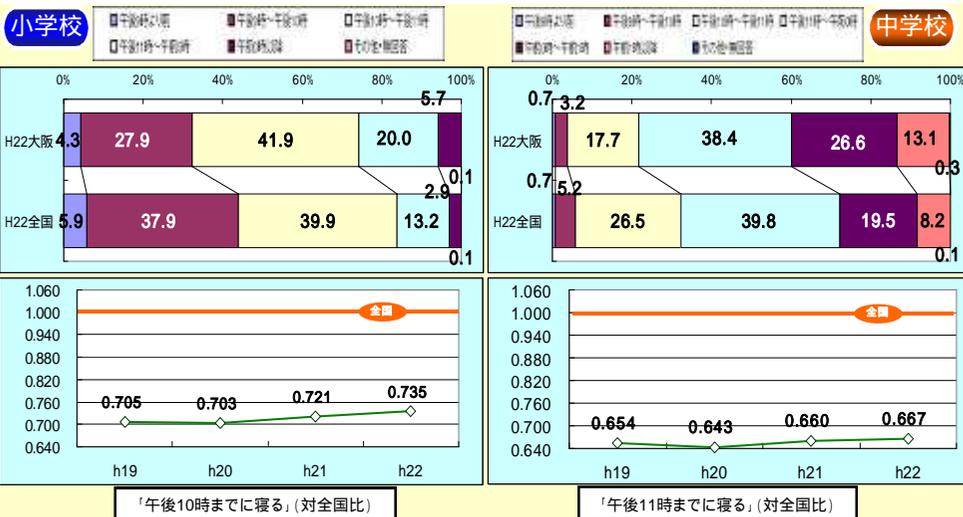
・小・中学校ともに、起床時刻は全国の状況に比べて遅い
・午前7時30分までに起きる児童・生徒の割合は、小・中学校ともにわずかではあるが増加傾向にある



3 就寝時刻

Q: 普段(月～金曜日)、何時ごろに寝ますか?

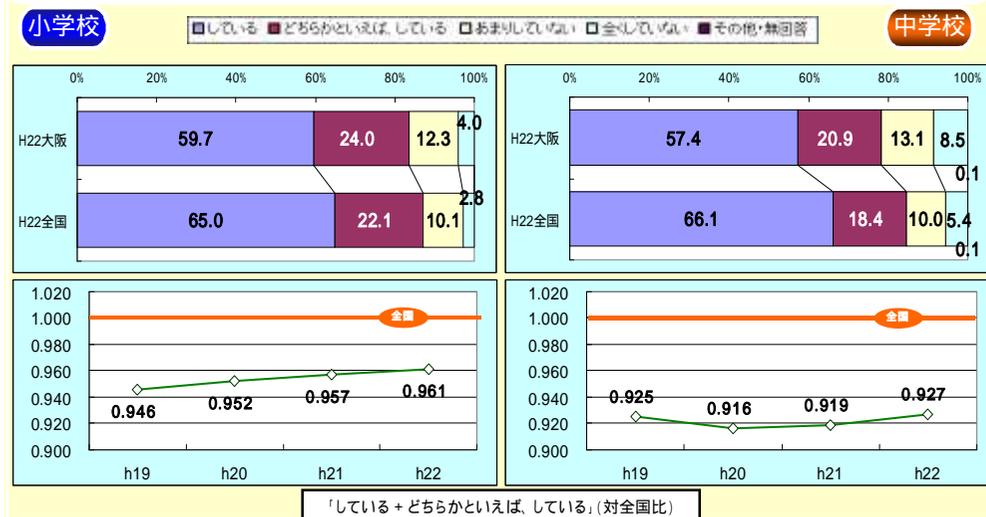
・小・中学校ともに、就寝時刻は全国の状況に比べて遅い
・小学校においては、午後10時までに寝る児童の割合が、わずかに増加傾向にある



4 準備物

Q: 学校に持って行くものを、前日か、その日の朝に確かめていますか?

・学校への持ち物の確認を前日、またはその日の朝に確認している児童・生徒の割合は、全国の状況を下回る
・小学校においては、増加傾向にある

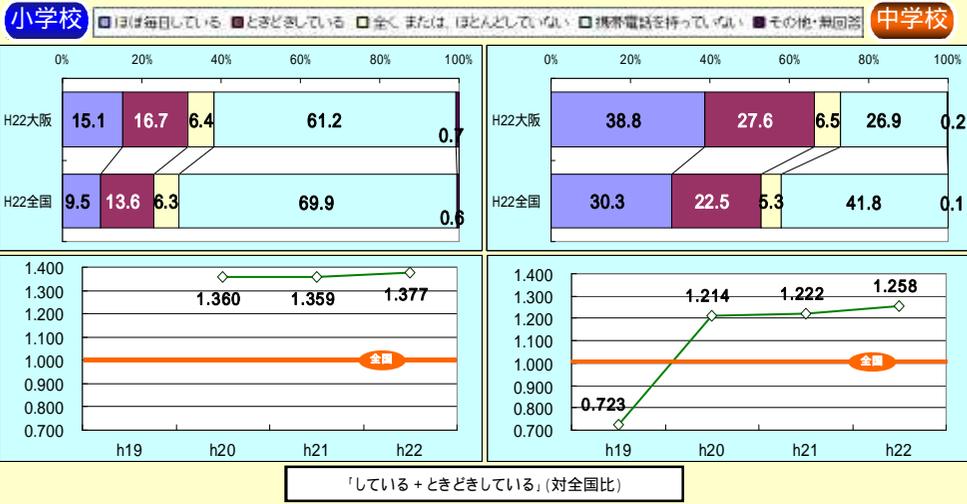


帯グラフの数値はすべて%表示です。
折れ線グラフの数値(対全国比)は、
大阪府/全国で算出した値です。

5 携帯電話の使用

Q: 携帯電話で通話やメールをしていますか?

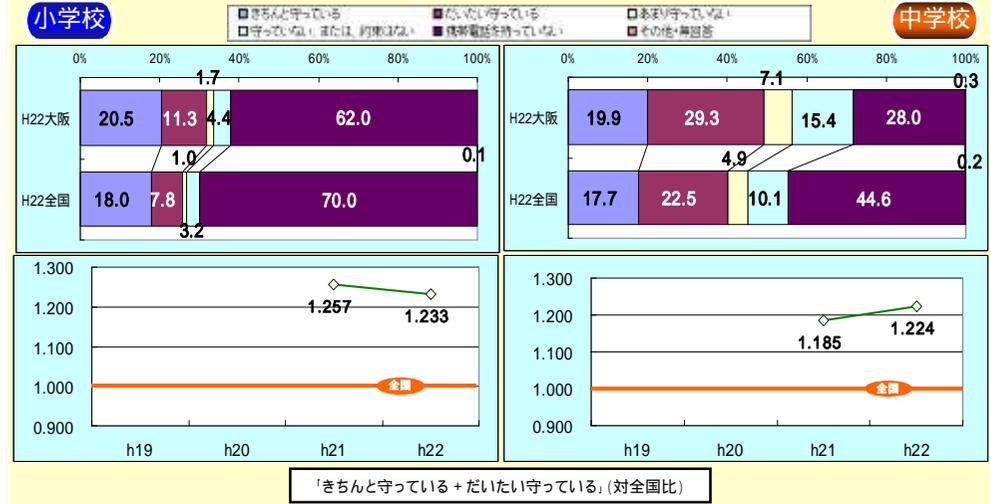
・携帯電話で通話、メールをする児童・生徒の割合は、全国
の状況を大きく上回る
・小・中学校ともに、携帯電話の保有率が全国よりも高い



6 携帯電話の約束

Q: 携帯電話の使い方について、家の人と約束したことを守っていますか?

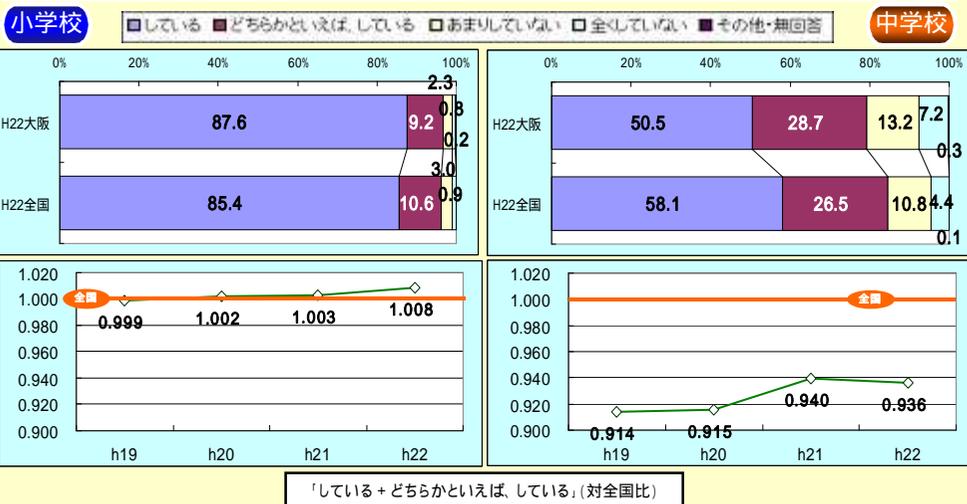
・携帯電話の使い方についての家の人との約束を守っている児童・生徒の割合は、全国の状況を上回るが、大阪府の子どもたちは、もともと携帯電話の保有率が高い



7 学校の宿題

Q: 家で学校の宿題をしていますか?

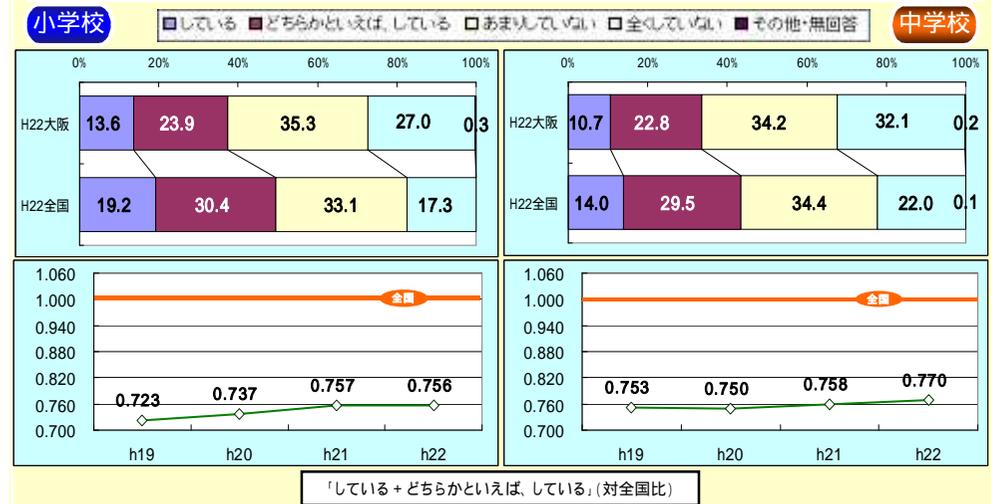
・学校の宿題をきちんとする割合は、小学校において全国
の状況を上回るが、中学校においては下回っている



8 授業の復習

Q: 家で学校の授業の復習をしていますか?

・家で学校の授業の復習をしている児童・生徒の割合は、
小・中学校ともに全国の状況を下回っている

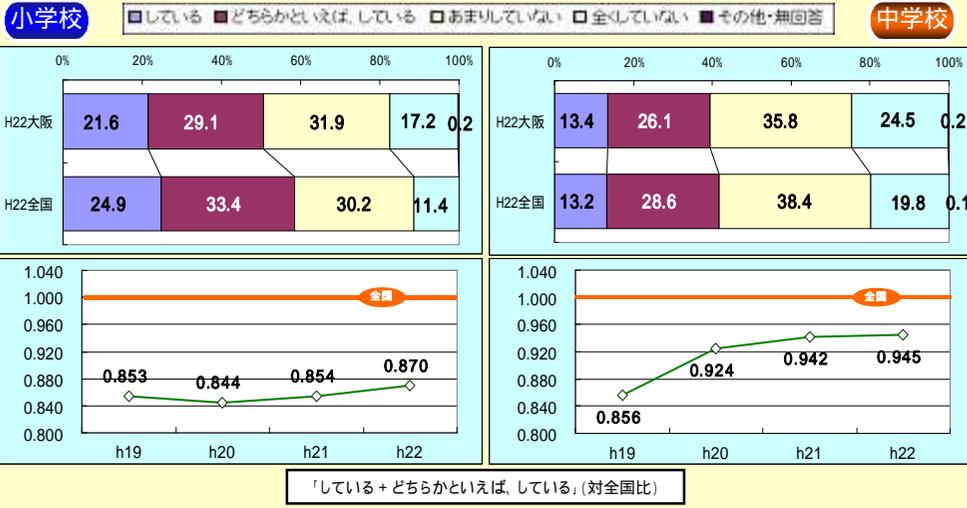


帯グラフの数値はすべて%表示です。
折れ線グラフの数値(対全国比)は、
大阪府/全国で算出した値です。

9 自主的・計画的な家庭学習

Q: 家で自分で計画を立てて勉強をしていますか?

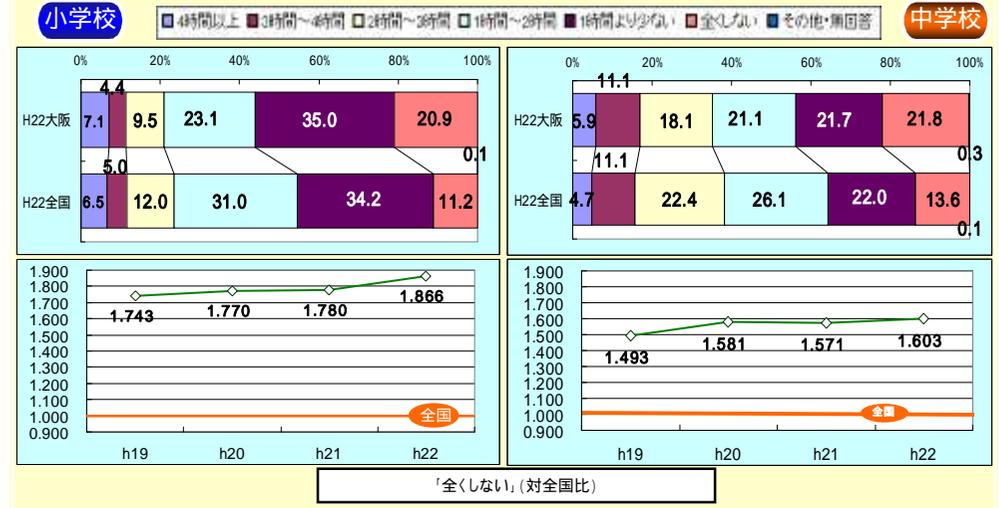
・自主的・計画的に家庭学習に取り組んでいる児童・生徒の割合は、全国の状況を下回る
・小・中学校ともに対全国比は増加傾向にある



10 休日の家庭学習

Q: 土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日あたりどれくらいの時間、勉強をしますか?

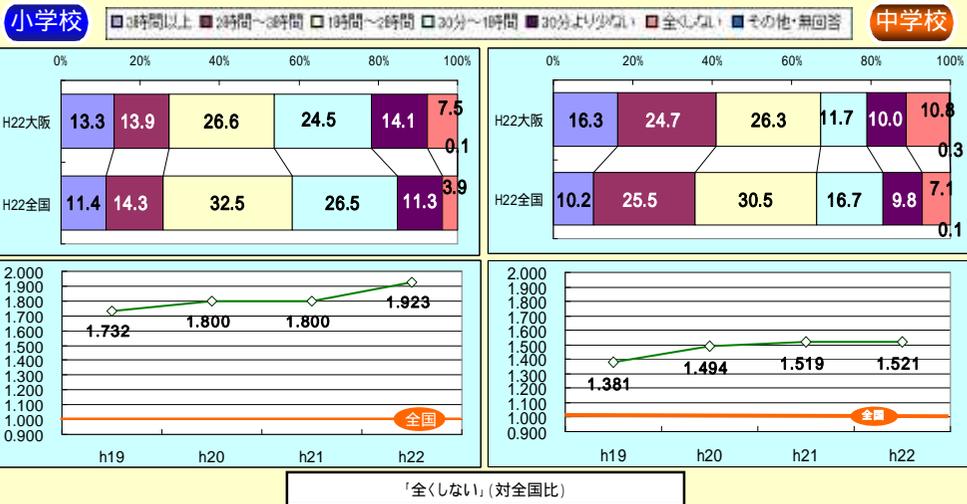
・休日に家庭学習をしない児童・生徒の割合は、全国の状況を上回る



11 1日あたりの勉強時間

Q: 学校の授業時間以外に、普段(月~金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、勉強をしますか?

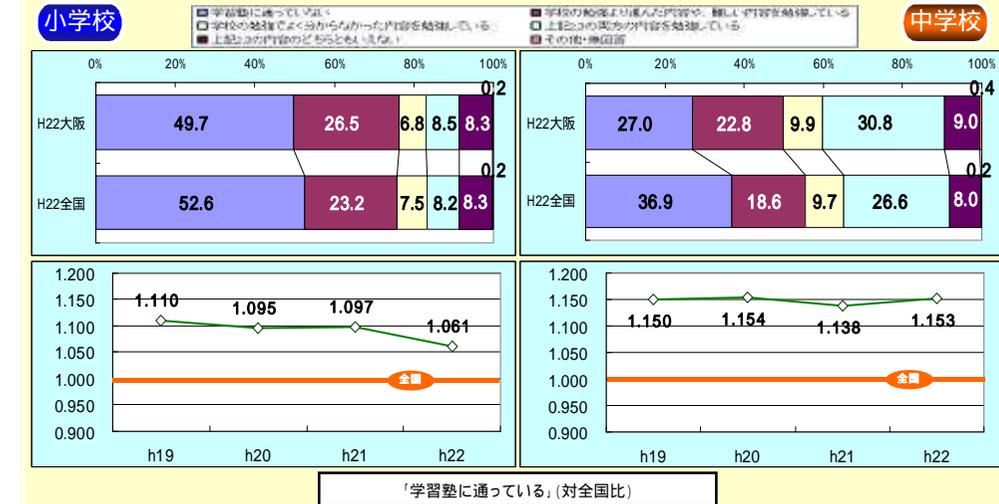
・普段、家庭学習に2時間以上取り組んでいる児童・生徒の割合と、全く取り組まない児童・生徒の割合がともに全国の状況を上回る



12 学習塾等での勉強

Q: 学習塾(家庭教師を含む)で勉強をしていますか?

・小・中学校ともに、通塾率は全国の状況を上回る

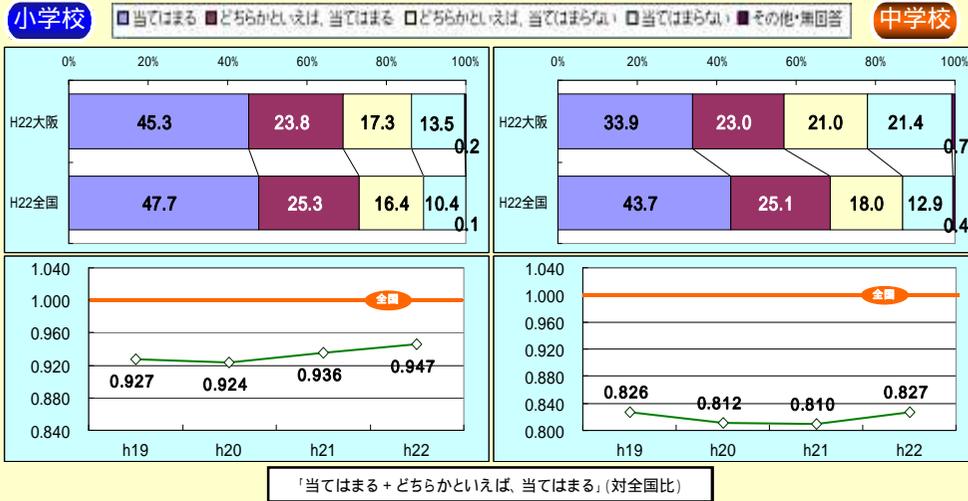


帯グラフの数値はすべて%表示です。
折れ線グラフの数値(対全国比)は、
大阪府/全国で算出した値です。

13 読書の好き嫌い

Q: 読書は好きですか?

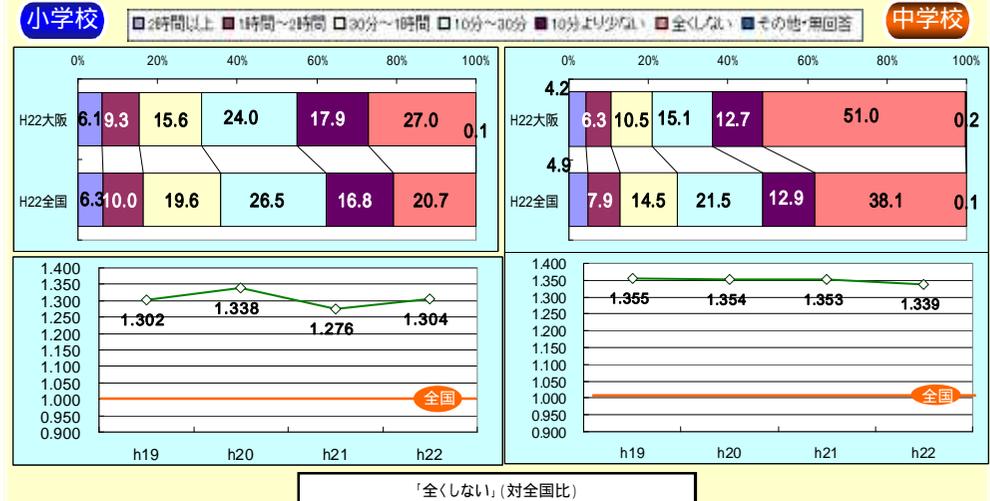
・読書の好きな児童・生徒の割合は、全国の状況を下回る
・小学校においては、対全国比は増加傾向にある



14 読書の時間

Q: 家や図書館で、普段(月～金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、読書しますか?

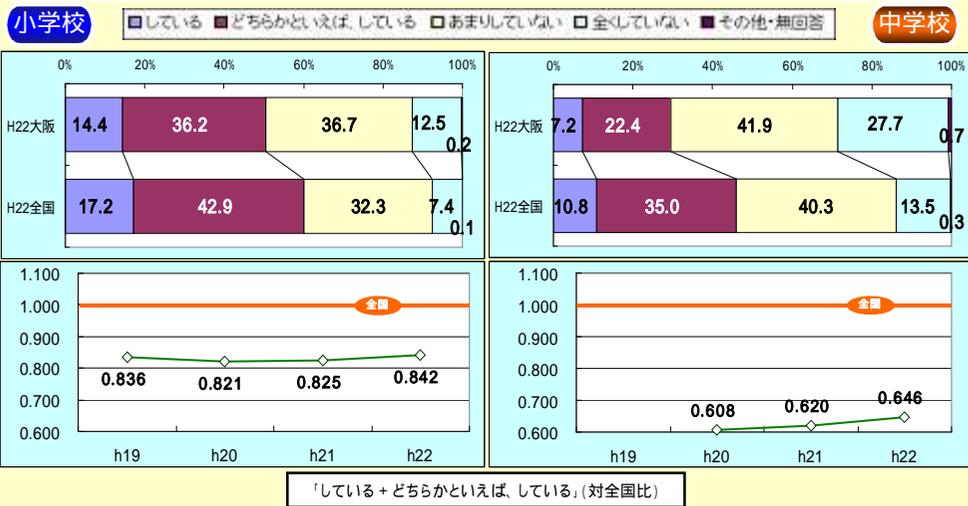
・普段、読書を全くしない児童・生徒の割合は、小・中学校とも全国の状況を上回る
・読書習慣の身に付いていない児童・生徒の割合が高い



15 国語の授業について

Q: 国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしていますか?

・国語の授業で、自分の考えを話したり、書いたりしている
と回答した割合は、小・中学校ともに全国を下回る
・特に中学校において全国との差が大きい

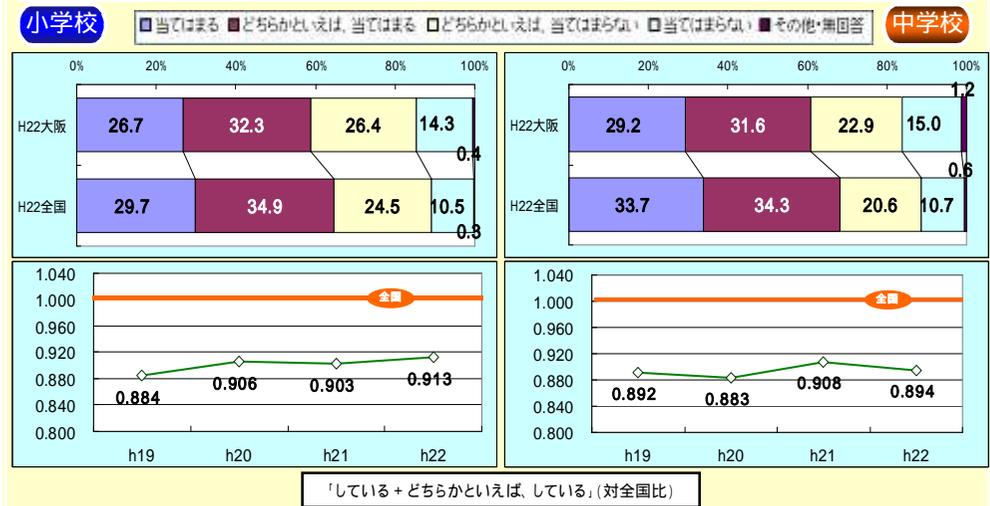


16 算数・数学の授業について

Q: 算数の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか? (小学校)

・算数・数学の学習内容を、普段の生活や将来のことに結び付けて意義付けている児童・生徒の割合は、全国の状況を下回る

Q: 数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか? (中学校)

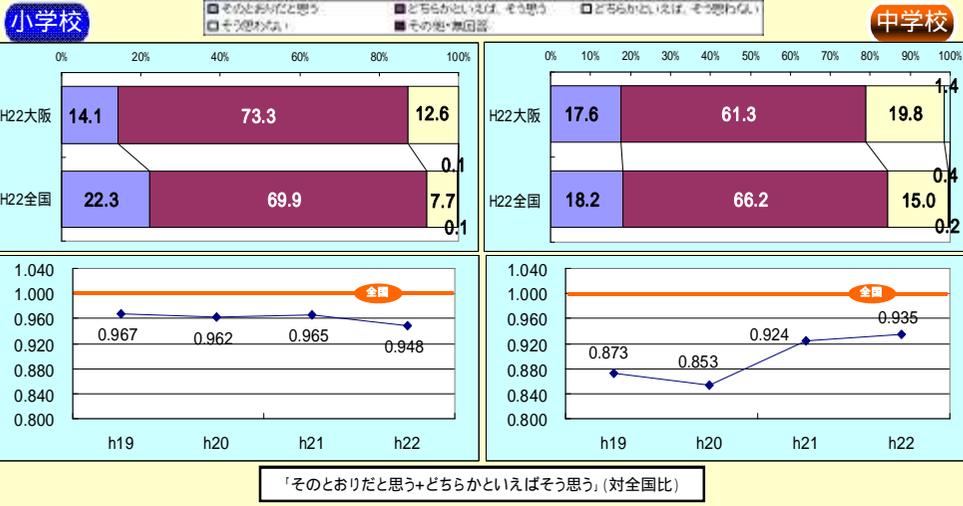


帯グラフの数値はすべて%表示です。
折れ線グラフの数値(対全国比)は、
大阪府/全国で算出した値です。

1 学習への熱意

Q: 熱意を持って勉強していると思いますか?

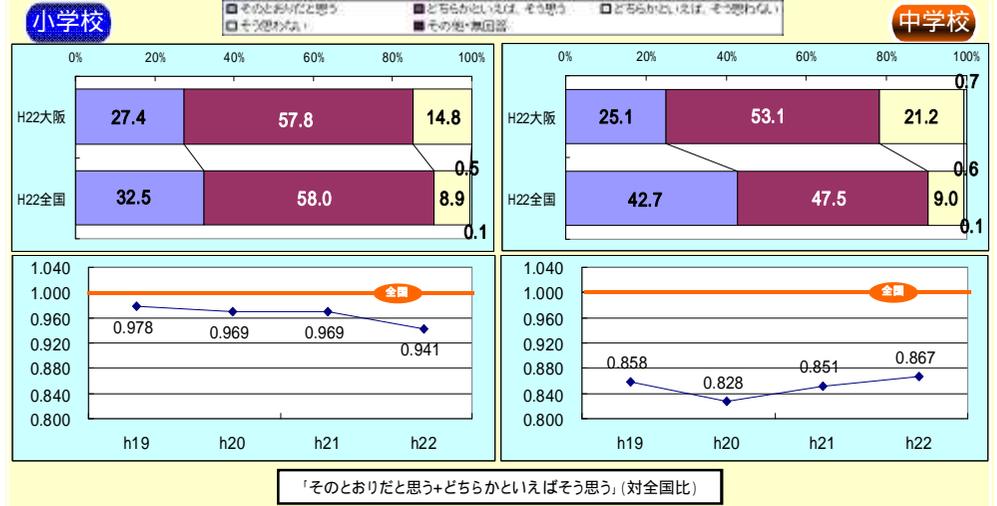
- ・「熱意を持って勉強している」と捉えている学校の割合は小・中学校ともに、全国の状況に比べて低い
- ・中学校においては、対全国比は増加傾向にある



2 授業中の落ち着き

Q: 授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか?

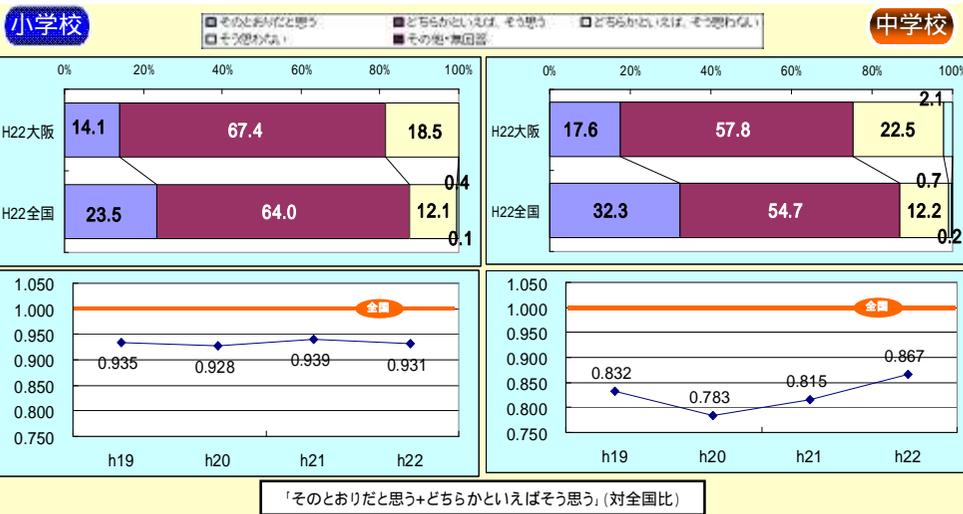
- ・「授業中私語が少なく、落ち着いている」と捉えている学校の割合は、小・中学校ともに全国の状況に比べて低い
- ・中学校においては、平成20年度以降、対全国比は増加傾向にある



3 礼儀正しさ

Q: 児童・生徒は礼儀正しいと思いますか?

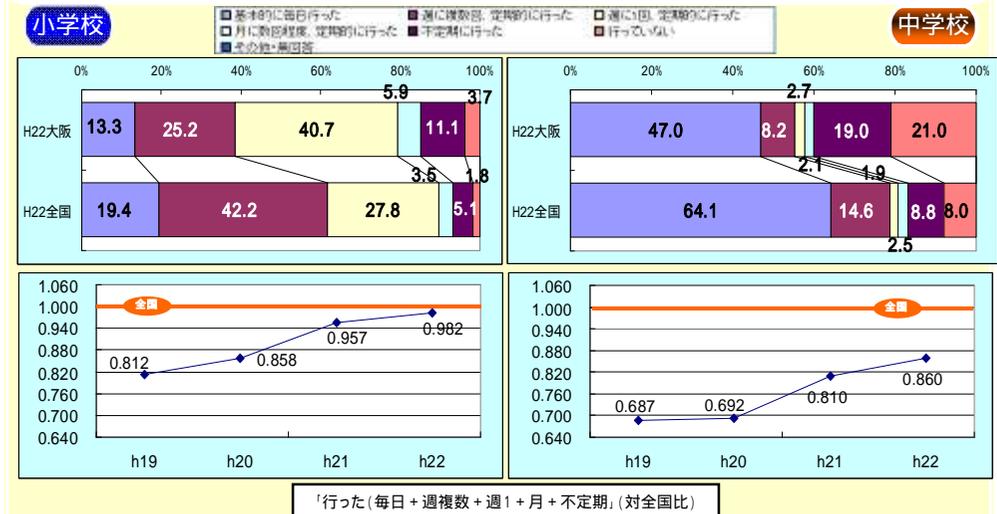
- ・「礼儀正しい」と捉えている学校の割合は、小・中学校ともに、全国の状況に比べて低い
- ・中学校においては、対全国比は増加傾向にある



4 朝の読書

Q: 一斉読書の時間を設けていますか?

- ・一斉読書に取り組んでいる学校の割合は、小・中学校ともに全国の状況に比べて低いが、対全国比は増加傾向にある



帯グラフの数値はすべて%表示です。
折れ線グラフの数値(対全国比)は、
大阪府/全国で算出した値です。

5 放課後の活用

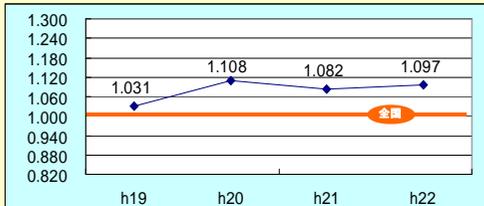
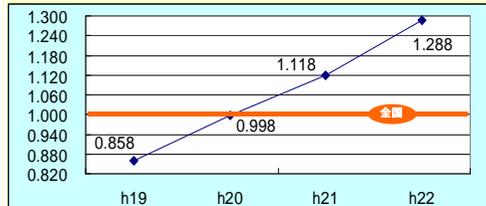
Q: 補充的な学習サポートを実施していますか?

- ・放課後の学習サポートの実施状況は、小・中学校ともに全国の状況を上回っている
- ・特に小学校においては、対全国比は大きく伸びている

小学校

□ 週に4回以上行った □ 週に3~4回行った □ 週に1~2回行った □ 月に数回程度行った
■ 月に数回程度行った ■ 行ってない ■ その他・無回答

中学校



「行った」の合計(対全国比)

6 授業サポート

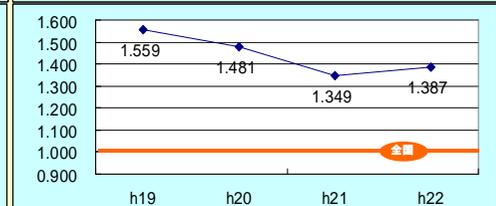
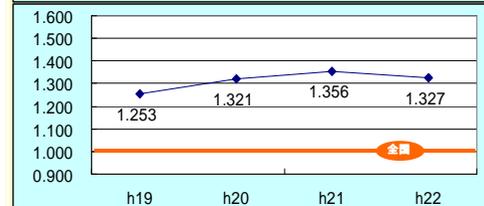
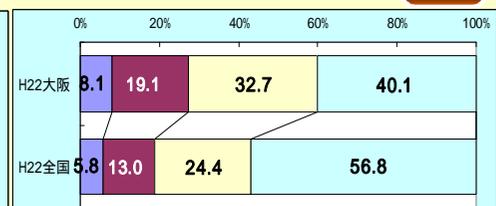
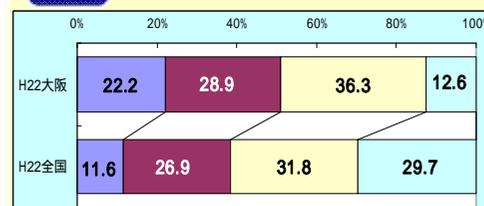
Q: ボランティア等による授業サポート(補助)を行いましたか?

- ・ボランティア等による授業サポートの実施状況は、小・中学校ともに全国の状況を上回っている
- ・小・中学校ともに継続して取組みが進められている

小学校

□ よく行った □ どちらかといえば、行った □ あまり行ってない □ 全く行ってない ■ その他・無回答

中学校



「よく行った+どちらかといえば、行った」(対全国比)

7 PTAや地域の人参加

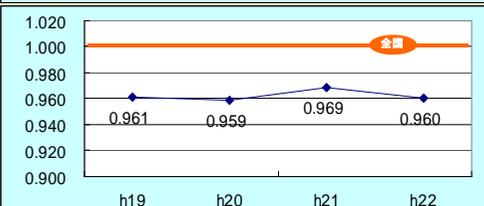
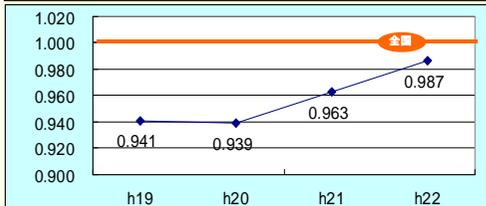
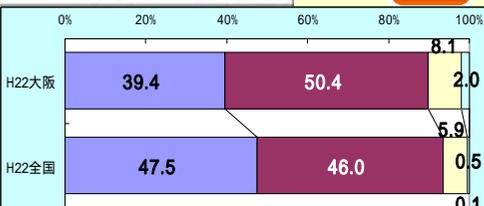
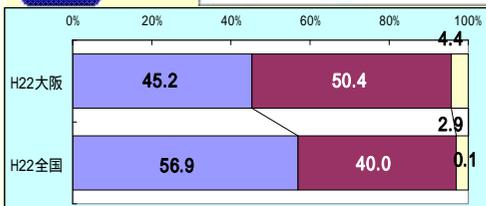
Q: 学校の諸活動にボランティアとして参加してくれますか?

- ・PTAや地域の人参加の学校が行う教育活動への参加状況は全国の状況を下回っている
- ・小学校においては、平成20年度以降対全国比は増加傾向にある

小学校

□ よく参加してくれる □ 参加してくれる □ あまり参加してくれる □ 全く参加してくれない ■ その他・無回答

中学校



「よく参加してくれる+参加してくれる」(対全国比)

8 学校公開日

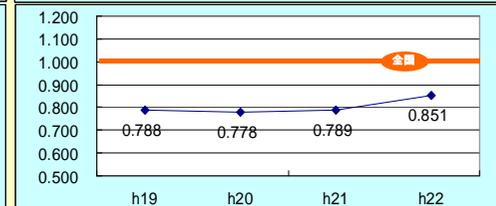
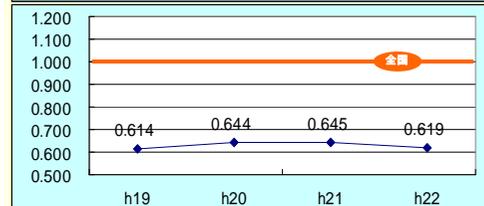
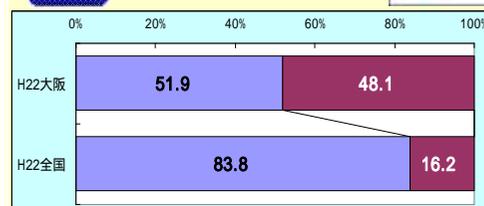
Q: 地域の人が自由に授業参観できる学校公開日を設けていますか?

- ・地域の人への学校公開日の開設状況は、全国の状況を下回っている
- ・中学校においては、対全国比は増加傾向が見られる

小学校

□ はい □ いいえ □ その他・無回答

中学校



「はい」(対全国比)

帯グラフの数値はすべて%表示です。
折れ線グラフの数値(対全国比)は、
大阪府/全国で算出した値です。

9 校内研修

Q: 授業研究を伴う校内研修を前年度、何回実施しましたか?

・授業研究を伴う校内研修の実施状況は、全国の状況を下回っており、特に中学校で低い
・小・中学校ともに、対全国比は増加傾向にある

10 就学援助

Q: 就学援助を受けている児童・生徒の割合は?

・小・中学校ともに、就学援助を受けている児童・生徒の在籍率の高い学校の割合が、全国の状況を大きく上回っている

